

# 風土記雜考

—— 日本武尊の場合 ——

久松潜 一

かつて校注風土記をまとめた時、風土記を幾度か読み返しながら種々の問題について考える機会を得た。その一は風土記と古事記や日本書紀や万葉集との関係ということである。古事記と日本書紀との比較の場合にも風土記を中において見ると解決される点もある。こゝでは日本武尊の記紀における伝承の相違を風土記と関連させて見たい。

日本武尊の歴史伝説は記紀に見えるが両者の間には相当の相違がある。熊襲の鎮撫の条は古事記にも日本書紀にも見えるが、古事記では日本武尊が中心となつてゐるに對して日本書紀では景行天皇の熊襲御鎮撫が主になり、再びそむいたので日本武尊が参られたことになつてゐる。そうして川上梟帥をうたれることになつてゐる。古事記では景行天皇のゆかれたことは見えていない。

この点を肥前風土記に見ると大足彦の天皇、即ち景行天皇のことは多く見えてゐる。たとえば、

纏向の日代の宮に、御宇しめしし大足彦天皇、球磨贈於を誅つゐなひて筑紫の国を巡狩しし時

葦北の火流の浦より発船して火の国に幸いさしき云々などそれである。景行天皇の記載の見える箇所は多くある。日本武尊の記載も肥

前風土記の佐嘉郡の条に見えてゐる。

日本武尊巡りいでましし時、梓の茂り栄えたるを覽まして勅りたまひしく、この国は栄の国と謂ふべし、とのりたまひき。因りて栄の郡といひき。

とあるのもそれであるし、小城郡に

昔、この村に土蜘蛛あり。堡を造りて隠り、皇命に従はざりき。日本武尊巡り幸しし日、皆悉に誅ひたまひき。因りて小城の郡と号く。

とあるのもそれである。藤津郡にも

昔日本武尊行幸しし時、この津に到りますに、日西の山に没りて御船を泊てたまひき。明くる旦、みそなはずに、船の纏とぢなを大き藤につなぎたまひき。因りて藤津の郡といふ。

とある。日本武尊が肥前風土記に見えるのはこの三カ所である。これに比べると景行天皇の見える箇所は遙かに多い。「昔纏向の日代の宮に御宇しめしし天皇、球磨を誅ひ滅して凱旋りきし時云々」ともある。肥前風土記の記載は古事記よりは日本書紀の記載に近いと言える。豊後風土記にも景行天皇に関する記載は数カ所見え、速見郡の条には、

昔纏向の日代の宮に御宇しめしし天皇、球磨贈於を誅はむと

欲して筑紫に幸し云々

とある。日本武尊に関する記述は見えていない。肥前豊後風土記は日本書紀と文句の同じい所があり、これらの風土記と日本書紀との関係は種々考えられるのであるが、風土記の日本武尊の伝説が古事記よりも日本書紀に近いのは当然であろう。

ことに記紀との相違を見る上で注目されるのは、出雲建に関する記載である。古事記では日本武尊が出雲によられて出雲建を肥河の水浴にさそわれ、建が水浴する間に木刀とすりかえて建が河より上つた時にこれをうたれることになつてゐる。

やつめさす出雲建が佩ける大刀つづらさはまきさ身なしにあはれ

という御歌も日本武尊の御作となつてゐる。ところが日本書紀では日本武尊には関係ない。崇神天皇の条に出雲臣の遠祖、出雲振根がその弟の飯入根を木刀とすりかへて殺したことになつてゐる。即ちその土地の出雲建兄弟の争いとなつておる。これは有り得べきことであり、地方の勢力家の兄弟の争が日本武尊の英雄伝説に結びついたものと解釈してゐた。ところが出雲風土記を見ると日本武尊の記載が見える。

出雲郡の建部郷を見ると次のようにある。

建部の郷、郡家の正東一十二里二百廿四歩なり。先に宇夜の里と号けし所以は、宇夜都弁命、其の山の峯に天降りまじき。即ち、彼の神の社、今に至るまで猶此処に坐す。故、宇夜の里といひき。しかるに後に改めて建部と号くる所以は纏向の檢代の宮に御宇しめしし天皇、勅りたましく「朕が御子、倭建命の御名を忘れず」とのりたまひて、建部を定め給ひき。その時、福門臣古禰を建部と定め給ひき。即ち、建部臣等、古より今に至るまで、猶此

処に居り。故建部といふ。

これによると宇夜の里を建部の里と改めたのは日本武尊の御名を忘れないためとあるのは尊が出雲に参られ、そこで建てられた御業を忘れないためであろう。そうすると日本書紀には見えないが、古事記に見える出雲建をうたれた功績とすべきであろう。即ち古事記の記載と一致してゐるのである。出雲風土記はこの場合では日本書紀よりも古事記の記載に近いことになる。また風土記の記載によつて古事記にある日本武尊が出雲に入られたこともそのようであつたかを思はせるのである。

古事記では出雲建とのみあるが、風土記では神門臣古禰を建部と定めるとある。この神門臣古禰は日本書紀にある出雲振根と同一人物であらうから日本書紀との関連もあるが、全体としては古事記と風土記とが近いのである。

日本武尊の東国平定の歴史伝説は古事記にも日本書紀にも詳しいが両者の間には相当の相違がある。殊に東国平定を日本武尊に命ぜられたのに対して尊がそれをどのようにうけとつたかについては古事記と日本書紀とは相違してゐる。古事記では尊が、「天皇早くわれを死ぬと思はず所以にか」となげいていられるが日本書紀ではそういう点はない。この両者の相違に対して風土記はどのようであるかはそれほど明らかでない。ただ常陸風土記では日本武尊のことが屢々見えており、かつ「古老のいへらく、倭武の天皇、此に至りまじし時、皇后参り遇ひたまひき」（久慈郡）とあるように日本武尊を天皇と申している。この場合の天皇はどういう意味であるかには種々の考え方があつた。日本武尊が常陸では天皇としてあがめられていたか、または天皇の仰せによつて鎮撫に向われたのであるから、その意味で天皇とあるか、もしくは天皇の意味を広い意味に解すべきかなど種々の点も指摘される。それにしても日本武尊の東国御鎮

無が大きな成果をあげたとしていることは明らかである。

いづれにしても古事記と日本書紀とを比較し、もしくは両者の異同を考察する場合に風土記が両者の異同をほぐす上に重要な意義を有することを指摘したい。風土記は諸国の風土や、旧聞遺事を断片的に遊離的にしているが、それだけに組織化されない素材のまゝで残されている点が多い。それだけ原初の伝承が残されている点も多いのである。出雲風土記の建部郷の記事など私の最も興味を感じた点である。

なお日本武尊の用字ならびに訓み方については問題がある。古事記では倭建命とあり、熊曾建から上つた御名としてある。日本書紀では日本武尊とあり、武を北野本では「タケノ」と訓じてある。古事記の建ならば「タケル」とも訓じ得るが、日本書紀の武では「タケノ」と訓ずるのが自然である。然らば風土記ではどのような用字であるかというに常陸風土記では倭武天皇とある。校注風土記では「やまとたけるのすめらみこと」と一応よんだが、今では「やまとたけるのすめらみこと」と訓じた方がよいかと思つてゐる。古典文学大系本では「やまとたけるのすめらみこと」と訓じてある。肥前風土記では三所とも日本武尊とあり、日本書紀と同様である。これは「やまとたけるのみこと」と訓ずるのがよいであろう。出雲風土記の出雲郡の建部郷では倭建命とあり古事記の用字と同様である。従つて「たけるの」とよむべきかと思うが、「たける」と訓じてもよい。用字では肥前風土記は日本書紀と同じく、出雲風土記は古事記と同じ。常陸風土記では両者を併せており、かつ天皇とあるのが注目される。

秋葉安太郎著

## 大鏡の研究 全二巻 各巻とも ¥二五〇〇円

### 上巻 一、大鏡本文の研究

- 1 大鏡本文研究の概要
- 2 比較諸本の概要

- 二、校本大鏡（陽明文庫底本）
- 三、校本大鏡総索引

語句索引

和歌・引歌・漢詩索引

実名音引人名索引

### 下巻

第一章 序説 第二章 代名詞

第三章 形容詞 第四章 動詞

第五章 存在詞 第六章 複語尾

第七章 副詞 第八章 助詞

第九章 音便

桜楓社出版